
夢と現実（仮）

やーかつ@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢と現実（仮）

【Nコード】

N0167K

【作者名】

やーかつ@

【あらすじ】

夢や希望に何度も裏切られ続けた男、櫻井一樹^{さくらいかずき}。しかし、それでも彼は夢を諦めることなく夢や希望が叶わないことを疑いはしない。そんな彼が小町優子^{こまちゆうこ}との幸せを夢見ていた。だがそれも結局は夢でしかなく告白してもフラれてしまう。それ以来、夢を見ることがやめて、現実を受け入れようとした矢先に、彼の前に現実を知る一人の少女があらわれる。

プロローグ（前書き）

前書き 初の作品です

自己満で書いておりますのでものすごい駄文ですが
興味があったら読んでください

プロローグ

現実はどうしてこうも思い通りにいかないのだろう。

僕の抱いた夢や希望は、いつも現実という名の壁に阻まれる。

小さな夢から大きな夢まで・・・

夢は機会こそ与えられるが誰もが叶うわけではなく、理想は近づくことこそ出来るが決して届くことはない。

だからこそ、

人は迷い、それらを求めても決して信じることはなく、

人は疑い、それらを自分勝手に想像して現実を知ればたやすく捨てる。

人は身勝手な生き物で、夢や理想におぼれても決して夢や理想の世界で生きることはない。

だからこそ俺だけが理想を信じ、理想に生きる、夢を信じ夢に生きる。空想にふけり、妄想し、残酷な現実から目を逸らす。

世界がどれだけ否定しようと俺だけが肯定する。人は僕を頑固者と罵るだろう、人は僕を現実逃避と嘲笑うだろう。けど、それでも俺は自分の世界せかいを貫こう。

信じる者がいなければそれらは決して叶うことはないのだから・・・

小町優子にフラれてから二日が過ぎた。

今、僕はあてもなく駅前通りを歩いている。今日は日曜日。休日とあってかいつも以上に歩道は人で溢れていた。

いつまでも塞ぎこんでいてはいけないと思い、気分を変えて外に出てみたものの、今の俺に行く場所なんてこの街には存在しない。どこにいけども人に埋め尽くされたこの街に、心の傷を抱えた自分が入りこむ余地はない。だからといって、この街に一人になれる場所も存在せず、俺はひたすら人ごみの中をただ黙ってあるくだけ。

誰も俺の傷には気付かない。

俺も他人の傷には気付けない。

お互い様の相関相互。

人は自分自身だけで精一杯。この街の人間は特に、だ。

俺もこの街の人間だからわかる・・・

一時期そんな柵から抜け出そうと他人の為に生きる正義のヒーローを目指したこともあった。しかし夢と現実はかけ離れたもの・・・どんなに人の為と思った行為も、結局はお節介のハタ迷惑。目の届く範囲の者さえ救えない俺は滑稽なアンチヒーローどまりで、真のヒーローには届かない。

思えばいつもそうだった。俺の夢や理想は現実の前ではあまりに儚くたやすく壊れる。俺の願望が現実になったためしはない。

俺の思いや想像は決して幻想の域を出ることがない。

そつ、何度も裏切られてきたんだ。

それでも俺は諦めない、今回も自分の夢が現実になるんだと疑わなかった。だからこそフラれるなんて思ってもいなかった。彼女と僕は相思相愛、この機を逃せば愛想をつかされると思い後悔しないためにも勇気を出して告白したが、結局今となっては後悔の連続。俺と彼女の理想の未来はもう、露まぼろしのごとく消えてしまった。せつかく考えた58通りのデートプランももう意味を成さないのだ。想像の中ではあれほどうまくいったのに・・・
何を間違えてしまったのだろうか。

夢を見たばかりにショックも大きい。

いつもならここで夢や理想を諦めることにはないのだが、今回は駄目みたいだ。

現実はどうしてこうもうまくいかないのだろう・・・

ここらが潮時、世界も夢を見るかと示唆してるのだろうか。

俺は今年で17だ。誰もが一度は夢見るサンタクロースや正義のヒーロ、お菓子の家や不思議な国を信じること自体、間違いなのかもしれない。

誰にでも優しい世界、誰にでも優しい存在、そんな優しい想いを抱かなければこんな辛い思いはしなかったのかも・・・

「はあゝ」

溜め息が出る。

憂鬱だ。

いつになく弱気な考えの僕を救えるものがいたら今こそ俺の前に現れてほしい。正義のヒーロ、天使、神、何でもいいー（できれば女の子の！）ー

でなければ俺は今までの自分を捨ててしまつかもしれない。

理想を捨て現実生きる哀れな存在へとなれ果ててしまつかもしれない。

「・・・理想は落下型ヒロインの天使なんだけどな。」

なんて自嘲気味に呟き、

そんなバカな幻想を抱いて空を見上げた時だった。

第一話 落下

顔をあげた先には女の子……。のはずもなく、そこにあつたのは何の変哲もない緑の看板。

気付けば先ほどまでの人垣は消えていた。どうやら知らずの内に人のいない方へと歩んでいたらしく、

今歩いている場所は駅前通りからやや離れた所で、ここには華やかさが無かった。

どうやら裏通りに入ってしまったらしい。

車の通りも無く、歩行者もほとんどいない。

前から思っていたことだがこの街は密度の差が激しすぎる。それであるであったり、建物であったり……

この通りは人の通りこそ少ないが建物ばかりが密集していた。しかしその建物どれもに人の気配は感じられない。

シャッターの閉まったバーやカフェ。テナントの入っていない雑居ビル。

昔はこの通りも栄えていたのかもしれないが、今は見る影もなかった。

ここは時代に取り残され名も忘れさられた悲しき通り。

もしこの通りにも意思があり、夢を見ることが出来るなら、昔のよう
に華やかな時代に戻りたいと願うのだろうか……

「はは、なんてな・・・」

小町優子こまちゆうこにフラれて気持ちがナーバスになっているのだろうか。
変な空想が頭をよぎる。

「・・・ん？」

空想を打ち消し我に返った時だった。

視界を横切る赤い影、すぐに消えてしまったがそれは・・・1

「・・・女の子？」

確信はない・・・

一瞬だったがその影は女の子のように見えた気がただけだ。

俺は少し気になって赤い影が消えた方へと視線を移す。そこにあつたのは一つのビル。

いや、ビルではなくデパートのようだ。

そのデパートの前まで行くと、何も飾られていないガラスケースや木の板でおおわれた入口が目についた。

どうやら随分前に廃墟になったらしく、所々に亀裂が走り建物の色がくすんでいた。

少女は・・・

入口を塞いでいる木の板が一部壊されている。

そこには人一人分のスペースが出来ていて、もしかしたら少女はここに入っていたのかもしれない。

辺りを見回すと微かであるが人はいる。

他にも少女の姿を見ている人がいるとおもっのだが、誰一人、我関せずといった感じで素通りしていくばかりだった。

はあ、正直あきれな・・・

そう、この街の人間は、自分のことで精一杯で他人をかまう余裕がない。

自ら厄介事に足を踏み入れることよしとをしない。

これがこの街の現実・・・

いまさら言うことでもない。

他人がやらないのであれば自分がやるまで・・・

そう、なぜなら俺は偽善者なのだから・・・

デパートの中に入ると真っ暗で先が何も見えなかった。

少女は本当にこの中に入って行ったのだろうか。

とてもじゃないがこんな暗い場所、入って行こうとは思えない。
何か目的があって入って行ったのか？

何故一人で？

疑問はいくつも浮かんだが今はそんなことどうでもいい。
早く見つけなければ・・・

俺は手を前に出して、ゆっくりと歩き出す。
足元にはガラス片が散らばっているらしく、歩くたびにジャリジャリと音がする。

少女は・・・

少し歩いたところで微かな光源を見つけた。
俺はすぐさま光源向かって進路を変える。

何となくだが今なら光に群がる虫の気持ちがわかるような気がするな・・・

暗闇の中で一筋の光はものを惹きつける力がある。

これは理屈じゃなくて本能なのだ。

多分虫は本能で光に惹きつけられている。

それと同じように今の俺も本能で光に惹きつけられている。――（虫が本能で光に群がっているのか分からないが・・・）――

光源の正体は黄緑の蛍光色で描かれた規則性のないデタラメな模様だった。

これはどこかのチームマークだろうか・・・

この暗闇の中でデタラメに見える模様は淡く発光して浮かび上がっているように見える。

マークを見ていると何故か急に不安になった。

早く少女を捕まえれば（・・・・・・・・）

「・・・・・・・・いた！」

視界の隅に映る影、それは紛れもなく赤い少女！

俺は少女向かって走り出す！

しかし、辺りは暗いためにスピードを出すことが出来ない。
少女との距離が縮まらない。

「・・・・・・・・待つて！」

少女は止まらない・・・

暗闇の中で追いかけっこ

少女は何度も角を折れその度に俺は少女の姿を見失う・・・

気付けば所々から淡い光が漏れていた。

どうやら他にも先ほど見た不可解なマークがあるらしい。

意味は分からないが今の俺には少しの明かりもありがたかった。

暗闇にも慣れたせいか視界が徐々にはつきりしてくる。

俺はスピードを上げた。

少女との距離はまだだいぶ離れている。

さっきから制止の声をかけているものの少女が止まる気配はない。

俺は必死に追いかける。

しかし出来事は突然。

何度目かの曲がり角。俺は少女が消えた曲がり角を折れた瞬間、突然の強い光に目が眩んだ。

蛍光色などではない強い光。

なまじ目が暗闇に慣れてしまったせいで、急な光源に対応しきれない。

次に視界を取り戻した先、そこにはエレベーターに乗る少女の姿が映った。

「なっ・・・！」

驚きは一瞬

強い光源の正体はエレベーターの照明灯。

何故廃墟と化した建物にエレベーターが動いているのか疑問に思ったがそんな思いもすぐに消えた。

警鐘が鳴る。

行かせてはいけない。

俺はすぐさま駆けだした。エレベーターまで10メートル。

くそ、無情にもドアが閉まりだす。

残り5メートル・・・

間に合うか！！

残り3メートル・・・

「ガタンッ」

くそ！、俺は思い切り扉を叩いた・・・

間に、合わなかった・・・

上を見上げると階を表示するランプが動き出した。

2 F / 3 F / 4 F / 5 F / R

ランプは屋上で止まった。

頭によぎるのは最悪の結末。

このままだと・・・

先ほどからボタンを押しているがエレベーターが一向に戻ってこない。

他のエレベーターはどれも動いていないらしく、少女の乗ったエレベーターだけが屋上で止まっている。

なんで、あの時・・・私は・・・

俺は辺りを見回す。
目にとまったのは非常灯。

「階段!!」

俺はすぐさま駆けだした。
階段を上る。

「はあ、はあ・・・」

屋上についた時には息も途切れ途切れだった。
体も熱い・・・

ここも外へと続く入口の部分には木の板が固定されていた。
しかし一階同様、一部分が壊されていて一人分のスペースが出来ている。

外に出ると一瞬だけ目が眩んだ。
目に飛び込むは青い空・・・
照りつける日差しがとても眩しい

俺はすぐに少女を探す。

屋上にはいくつか子供向けの用具が目についた。

「・・・いた」

視線の先に少女の姿はあった。
しかし俺は少女の立ち位置に絶望する・・・

少女はフェンスを越え、死の淵まであと数歩のところはこちらへ背

を向け立っていた。

「駄目!!」

俺は叫ぶ・・・

しかし少女はこちらを振り向かない。

少女まで20メートルは離れているだろうか。

少女の着ている赤いワンピースが風でなびている。

少女まであと15メートル・・・

先ほどから声をかけているのだが少女は一向に振り向かない

少女まであと10メートル

なぜこんなことになってしまったのだろうか・・・

今思えば後悔の連続。私はあの子に・・・

残り5メートル

今にでも駆け出したいが少女のフェンスを掴む手があまりに儂く、少し驚かせただけで消えてしまいそうだった。

手を前に出す・・・

あと少し、あと、少しで・・・

「駄目！！！！」

「っ！！」

背後から聞こえた突然の怒声。

俺は驚き、振り返る・・・

そこには声の主と思われる一人の少女。青いワンピースに身を包み、空から降ってきたのではないかと
思わせる登場ぶりに、俺は思わず・・・

いやっ！違う！

今は・・・

前を向き直すと少女はフェンスから手を離し、既に体は傾いている。

「っな、待って！ 綾子！！」

俺は駆け出しフェンスを乗り越え、少女の手を掴もうとした瞬間、
手を引き戻される感覚と、背中に走る衝撃が同時に襲い、俺は少女
の手を掴むことなくすぐに意識を失・・・った

第二話 病院で・・・

誰かがどこかで傷ついている・・・

誰かがどこかで悲しんでいる・・・

誰かがどこかで嘆いている・・・

誰かが俺を求めている・・・

誰かが俺に・・・願いを・・・

「っ、・・・ここ、は？」

目を覚まして一番に入ってきたのは真っ白な天井だった・・・

「目が、覚めましたか？」

「っ！？」

急に女性の顔が目の前に・・・！

「驚きましたか？ここは病院です。櫻井さん、二日間も眠ってらしたんですよ」

ナース服に身を包んだ看護婦のお姉さんは笑顔で告げる。

「あの、俺はどうして、ここに・・・」

「あ・・・もしかして記憶が混乱しているんですか？けど大丈夫ですよ、永い眠りについていていた人によく顕れる症状ですから」

そう言つて看護婦のお姉さんはニツコリ笑った。

「あのっ痛!？」

身を起したそうと背中を曲げた時、衝撃が走った。

瞬間、倒れる前の記憶がよみがえる・・・

「駄目です！身体を起こしては。まだ傷が塞がっていないんですから」

そう言つて看護婦のお姉さんは静かに身体を寝かしてくれた。
なんだか照れるが今はそれより・・・

記憶が戻った瞬間、俺はあの赤い少女が気になった。

俺は・・・掴むことができなかった・・・

俺は・・・

「大丈夫ですか？」

看護婦の姉さんは優しく手を握ってくれた。

自然と力が入っていた拳が急速にゆるんでく・・・

「あの・・・女の子は・・・？」

俺は恐る恐る聞いてみた。あの高さから落ちたら助かるわけがない。それでも一縷^{いちろう}の望みをかけて・・・

「え、女の子？私以外この病室に女の子は来ていませんよ？そもそも櫻井さんは面会謝絶ですので見舞いの方も・・・」

「いや、違います、女の子が俺以外にも運ばれてきていませんか？」

「女の子？あの日運ばれてきたのは櫻井さんだけでしたが・・・」

「えっ？じゃあ他の病院に！？」

「うーん、まだ記憶が混乱しているみたいです。意識は戻ってもこれでは事情聴取など無理でしょう。警察の方にはこちらから報告しておきますので、櫻井さんはゆっくりと休んでいてください。くれぐれも身体を動かさないように。いいですね？」

「えっ？・・・ちよつと待っ」

「心配しないでください。夜になったらまた来ます」

「えっ？」

そう言って看護婦らしきお姉さんは病室から去って行った。

何がどうなっているんだろう・・・

女の子は死んでしまったのだろうか・・・

あの時俺は、少女を掴もうとした瞬間、何かに腕を引っ張られ、それで急に背中に激痛を感じて・・・

「痛っつー!」

少し動くだけでも背中が痛む。

くそ、・・・訳の分からないことだらけだ。

女の子はどうなってしまったんだ・・・

誰か事情を知る人はいないのだろうか・・・
俺は手元にあったナースコールを押し、何か事情を知らないか看護婦さんに尋ねることにした。

「どうしましたか？」

「あのちよつと聞きたいことがあって・・・」

「聞きたいことですか？ちよつと待ってください・・・春野先生、櫻井さんが何か聞きたいことがあるんですけど、「分かりました。すぐ行きます」 え？でも春野先生、今から山下さんの検診に行くんじゃない」「そんなのは後回しです」・・・あ、はい。わかりました・・・櫻井さん、今から行きますのでちよつと待っていてくださいね」

「あ・・・はい」

さっきの後ろでのやり取りは何だろうか？

コンコン

「あ、はい。どうぞ」

「失礼します。どうしましたか櫻井さん」

扉を開けて入ってきたのは先ほど同じナース服を着た看護婦のお姉さんだった。

えーと・・・この人が春野先生なのだろうか・・・

「あの、さっきナースコールしたとき、後ろの方で春野先生と呼ばれている方が来ると聞いたのですが・・・」

「ええ、私が春野ですよ。そういえば名乗っていませんでしたね。
私が春野恵です。はるのめぐみ」

よろしければ「めぐみ」と呼んでもらっても構いませんよ」

「は？・・・あ、いや・・・すみません。ナース服を着ているので
てつきり看護婦さんかと・・・」

「ああ、これですか？単に白衣よりナース服のほうが櫻井さんにウケるかと思ひまして着替えてたんです。お気に召しませんか？」

「いや、そんなことは・・・」

「そうですか、良かったです」

そう言つて心から安堵した表情を浮かべる看護婦のお姉さん改め女医のお姉さん（春野先生）

・・・何なんだろうこの人は、どこか危ない気がする。

「あの・・・、さっき聞くの忘れてしまったんですが、俺の怪我ってひどいんですか？」

「そういえばまだ伝えていませんでしたね・・・櫻井さんの傷は12針を縫う重傷です。あと十日間はこちらで入院してもらうことになるでしょう」

「十日も!？」

「はい、しかし安心してください。傷は深いですが応急処置と発見が早かったそうで大事には至りませんでしたし、安静にしていれば少し早く退院できるかもしれませんので」

「そう、ですか・・・」

「他に、聞くことはありませんか？何でも聞いてください」

・・・俺は少し迷った。けど・・・

「あの、・・・少女は・・・死んだんですか？」

春野先生は一瞬、困ったような顔をした。

「・・・・・・櫻井さんの言う少女が誰かは知りません。しかし櫻井さんが運び込まれたあの日、少女が運び込まれたという記録はどの病院にもありませんでした。もちろん死亡報告もありません。私は一介の医師なので櫻井さんが運び込まれた経緯を詳しく知りませんので、その辺りは明日見える警察の方に尋ねてみてください」

「そう、ですか・・・」

春野先生が嘘をついている様子はない。最初は自分にショックを与えないために少女の死を伏せていると思ったのだがどうやら考え過ぎだった。この人は本当に何も知らないのだろう。今は警察が来るまで待つしかない。こちらでも分からないことだらけなんだから何を聞かれるのか分からないのだが・・・

「すみません、櫻井さん、何でも聞けと言っておいて、私は櫻井さんの満足いく答えを返すことができませんでした」

「え？あ、いやいや、とんでもない！それだけでも十分です」

「そうですか？けどなんだか・・・あ、お詫びといってはなんですがスリーサイズを・・・」

「え？・・・」

なんなんだこの人は・・・さつきから思っていたのだがこの人は俺をからかっているのではないか？

女医なのにナース服きているし、ナース服のせいで体のラインははつきりと浮かび上がってるし・・・

「上からはちじゅ・・・」

「ちょっと待った！！・・・あの嬉しいんですけど、困るというかー応俺も健全な男の子なので、その・・・なんと言いますか・・・」

口ごもるのは男の性、はつきり拒絶できないのやはり期待しているからなんだろう。

その時・・・

コンコン

「春野先生、山下さんの容体が急変しました！！すぐに来てもらえませんか！？」

「・・・わかりました、すぐいきます。・・・すみません櫻井さん、また来ますので」

そう言つて春野先生は早足で病室から去つて行つた。

取り残された俺はというと春野先生が去つていったおかげで心の底から安堵するのであった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

次の日の朝、目が覚めると一番に飛び込んできたのは病室の天井、ではなく春野先生の顔だった。

「うお！？」

「あ、目が覚めましたか？朝食の用意はできていますが、先にご飯にしますか？それともトイレに行きますか？良ければ「私」もありますか？」

矢継ぎ早に繰り出される選択肢に、俺は一応「ご飯」と答えると、春野先生は横に置いてあったカバンから弁当箱を取り出して俺の前へと置いた。

「・・・これは？」

「朝ご飯です」

俺はてっきり病院食が出されると思っていたのだが、俺の前には明らかに手作りの弁当が置かれている。昨日は普通に病院食が出てきたのだが、なぜ今日に限って・・・

「昨日は櫻井さんがいつ起きるのかわからなかったので、お弁当を作る事が出来ず、しょうがなく病院食を食べてもらいましたが、今日からは私が作ってきたお弁当を食べてもらいますので食べたいものがあつたら遠慮なく言ってください」

「あ、ありがとうございます・・・」

何かもういろいろとツツコミたかったがややこしくなりそうなのであえて触れないようにした。

食事をすましたところで病室のドアをノックする音が聞こえた。

「あ、多分警察の方ですね。通してもよろしいですか？」

「あ、はい・・・」

あまりに急で少し身構えたが、春野先生が優しく手を取ってくれたので落ち着くことが出来た。

こういうところは、実に医師らしく、頼りがいがある。多分今までの行為は僕を氣遣つてのことなのだろう。

春野先生は、僕の返事を聞くとドアの方へと歩いて行つた。

「失礼するよ・・・」

そう言つて入ってきたのはヨレヨレのコートを着て髪を乱雑にかきあげた中年の男。表情からは明らかな疲れの色とやる気のなさが浮かんでいた。そしてそのあと、中年の男に続き今度は若い男が入ってきた。こちらは中年の男とは対照的に紺のスーツをビシッと決め、髪も整髪剤で整え、やる気がまじまじと感じられる。

「悪いね、急に押しかけちゃつて。食事中だったかい？」

「いえ、もうすましました」

「それは良かった。こちらも忙しんでね、あの時の現場状況を簡単に説明してすぐに質問を始めるけど大丈夫かい？」

「はい」

ヨレヨレのコートを着た刑事は僕の返事を聞くと、後ろに控えている若い刑事に目で合図した。

若い刑事は手帳を広げる。

「それじゃまずは自己紹介しておこうか。僕の名前は黒沢^{くろさわ}。で後ろにいるのが「中島^{なかじま}です」で君が櫻井一樹^{さくらいかずき}くんだね」

「はい」

「じゃあ簡単に、君がこの病院に運び込まれたまでの流れからだ。中島」

「はい、10時52分、公衆電話から救急へ、廃墟の屋上で血を流している人がいるとの通報を受け5分後救急車が現場に到着。隊員が屋上へ行くと通報通り血を流した青年を発見。出血の原因は背中からの切り傷、意識はないが応急処置が施されていたため命に別状はなし。全治1カ月の切り傷です」

「ありがとう。じゃあ次だ」

「はい、今までの調べによると、被害者は櫻井一樹^{さくらいかずき}さん、年齢16歳の高校二年生。被害者が廃墟に入っていくところを数人の目撃者が証言しています。しかし、被害者以外の廃墟への出入りを目撃した者はなく犯人については不明。しかしあの廃墟は以前から不良のたまり場になっていらしく、今そちらの線について調査中です。次に被害者の傷跡から凶器は鋭利な刃物であることと推定。傷の深さから推測するに刃渡り70センチから100センチの長刀かと思われる。現場や現場付近に凶器が見つからなかったため、犯人はそのまま凶器を持ち帰った可能性が大きく、ただいまそちらも捜査中です」

中島という警部は一度もつかえることなく言い切った。

「と、まあそんな感じですが、なにか言いたいこともあるでしょうが

それはこちらの質問の後でお願いします」

今度は黒沢という刑事が締めるように言った。

「じゃあ早速質問を始めるけど、櫻井君はどうしてあの廃墟に入っただのかな？」

黒沢さんは思ったより碎けた口調で質問してくれたので変に身構える必要はなかった。

「・・・女の子が廃墟に入っていったのを見たんです。それで心配になって女の子の後を追いかけて行ってあの廃墟に入りました」

「ふーん、女の子、ね。じゃあ君はその女の子を追いかけて屋上まで昇ったと？」

「はい」

「その女の子はどうなったか分かるかな？」

「いえ、女の子を捕まえようとしたら、急に背中に激痛が走って・・・」

「気付いたら病院にいた、と？」

「はい」

「じゃ君を斬った犯人の姿は見ていないんだね？」

「・・・はい、見ていません」

「……そうか、じゃあ、その女の子の特徴を教えてくださいかないかな？」

「？」

「もしかしたら君を斬った犯人はその少女を誘拐したかもしれない」

「な！？」

「あの現場で見つかったのは君だけだ。もし君の言うとおり少女があの場合にいて君が斬られる現場を目撃していたのならその少女は高い確率で誘拐、拉致された可能性がある」

俺は、気付かなかった……確かにこの刑事の言うとおりだ。怪我や死亡でなければ誘拐されたと考えた方が妥当だろう。

「さっきも中島が言ってたが、僕らの聞き込みや、調べによると少女が廃墟に入っていたという目撃証言はなかった。まあ、あの通りは人の交通量が少ないし、目撃者がいなくても不思議じゃないけど」

俺の頭には一人の少女が浮かんでいた。青いワンピース姿の少女。俺を斬りつけたであろう犯人。さっきは確証が無くて黙っていたのだが、女の子を誘拐したとなれば伝えなければならぬだろう。

「……くん……井くん・櫻井君！」

「え？、あ、はい……」

「どうしたんだい？ぼつとしちゃって？」

「あ、・・・いや」

「じゃあ話を戻すけど女の子の特徴をおしえてくれるかな？」

「はい、赤い服を着た女の・・・」

あれ、赤い服を着た女の子だったのか？思い返すとあまり印象に残っていない。いや、昨日までは確かに印象に残っていたのだが、一秒ごとに段々薄れていっていくのが判る。あれは女の子だったのか？そもそもあれは・・・

「どうしたんだい？」

「あ、いえ、あの時は必死で追いかけてたんで今思い出すとあまり印象に残っていないというか・・・」

その、多分力になれないと思います・・・」

「・・・そうか・・・じゃ一応赤い服を着た女の子ってことでいいかな。中島。「はい」僕たちはこれで失礼するよ。新しい情報も入ったんでね、早速調査を始めないと」

「・・・はい、お願いします」

「うん、ご協力ありがとう。これ、僕の携帯番号、何か思い出したら気軽に連絡して」

そう言って渡されたメモの切れ端を俺は受け取った。

「じゃあ、お疲れ様」

ガラガラ

「お疲れ様です」

刑事と入れ替わりで入ってきた春野先生がねぎらいの言葉をかけてくれた。

「どこか体調がすぐれないとかはないですか」

「いえ、大丈夫です」

「そうですか、私はこれから会議があるので付き添うことができますがもし何か変わったことがあったらすぐに私を呼んでください」

そう言って渡してきたのは携帯番号の書かれたメモだった。

「それでは」

「あ、はい・・・」

ガラガラガラ

「はあ」

溜め息が出る。

俺は結局、刑事さんに自分を斬ったと思われる少女のことを話すことが出来なかった。

まだまだ謎は残る・・・

どうしてこんなことになってしまったのだろう。

あれから三日が経った。今日は水曜日か・・・

あ、・・・そいえば学校だよ

いや、いいか・・・

正直、小町優子こまちゆうこにフラれたせいで、学校へ行く気持ちなどなかったし、今は顔を合わせることもできそうにない。

あと九日、この入院は時間をおくには丁度いいだろう。

早く心の傷が癒えることを願って、俺は・・・赤い影のことを・・・思
い出そうとした・・・

第二話 病院で・・・（後書き）

間隔が空いてしまいました。

そろそろ忙しくなってくるので、まずいかもしれません。

早く次話を投稿できるように頑張ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0167k/>

夢と現実（仮）

2010年10月10日06時22分発行